香葉

1992　　NO.21

目　次

講演会への御案内……1
会長あいさつ……古　城　房　子……2
学長あいさつ……小　玉　敏　子……3
女専のページ……4
定年の時を迎えて……松　本　久　子……6
覚え書（十九）……上　市　二　郎……7
お元気ですか？……10
CAMPAS　MAP……12
吉屋敬先生講演会を終えて……岡　崎　敬　子……14
コーヨースポット
　或る家族……中　島　理　恵……16
　新局面を迎えた女の時代のなかで……阿　部　典　子……18
香葉室……20
図書紹介……22
クラス会報告……23
県央のつどい……25
「豊かな生活文化とは」……大　越　公　平……25
母校ニュース……26
編集後記……26
決算・予算……27
賛助金……28

表　紙……関　　頼　武
カット……漫画研究部
（国文25期生）

現代の女性と家庭問題について
－適切なアドヴァイスを下さる評論家－

『円（まどか）より子先生　講演会』

今年は、様々な人生模様を通して私共の生き方を示して下さる円先生をお迎えしております。きっと皆様方の参考となるお話が伺えると期待しています。ぜひお出かけ下さい。

テーマ：『現代女性と家庭』
日　時：1992年11月３日（火）
午後１時30分～
場　所：図書館棟５Ｆ　視聴覚教室

▼講師の紹介▼

1947年　神奈川県に生れる。
津田塾大学英文科卒業後、ジャパンタイムス編集局勤務。退社後フリーのジャーナリストとなる。
1979年　ニコニコ離婚講座を主宰。
1981年　ハンド・イン・ハンドの会を主宰。
1982年　現代家族問題研究所代表となる。
講座・ＴＶ出演・著作・相談活動等に活躍。先の参院選で、日本新党から比例代表に立候補した。１児の母。

▼主な著作▼

・主婦症候群
・妻たちの静かな反乱
・夫、あぶない
・離婚を選んだ女たち
・ターニング・ポイント
・再婚時代
・離婚女性成功物語　その他多数

今までにお願いした講演者及び演奏者（敬称略）は下記の通りです。今年もご期待下さい。

1985・永井　路子
1986・鳥飼玖美子
1987・田中喜美子
1988・ハンドベルクワイヤ（三春台中・高校生）
1989・宮崎　安子
1990・吉武　輝子
1991・吉屋　　敬

★香葉会の部屋★ご案内

卒業生と在校生、教職員の交流の場として、又卒業生の部屋として３号館101号室にて、コーヒーとお菓子のサービスをいたします。お友達同志・ご家族お誘い合わせの上お立ち寄り下さい。

※　11月２日・３日　　両日とも開室いたしております。
※　クリスマスリース・ツリー・小物等の販売もいたします。

香葉会のこと

会長　古城房子

私たちの母校は、第二次世界大戦の傷跡も癒えぬ一九四六年四月、男子校であった関東学院に、初めて女子の専門学校として誕生しました。それが、文部省の学制改革によって短期大学へと移行されたのが一九五〇年です。当時、女専附属の女子高、女子高別科が併設され数年で閉校、二部は男女共学で十五年程続き、一九六〇年に閉校されています。終戦当時の混乱と、当時の先生方の教育に対する情熱、若い人達の勉学への欲求がしのばれる思いです。同窓生は大学同窓会の燦葉会に入り活動はすべて、燦葉会のプログラムに従っておりました。一九六〇年、女専、短大の卒業生有志が集まり短大独自の同窓会活動を始めました。燦葉会短大支部として援助金を活動費として戴きましたが、ごくわずかなもので、殆ど委員の自便でした。年々、会員数がふえ、三千五百名位になった時、燦葉会から完全に独立して「香葉会」となり、今年は二十二年目を迎え、会員は一万九千名になっております。昨年お届けした香葉二十号に、その歴史をご紹介しましたが、今年から又、初心に帰って新しい一歩を踏み出したいと思っております。香葉会の主な仕事は、名簿の発行、機関誌の発行です。結婚や転職によって姓や住所が変られる方が多く、名簿の整理が中々大変です。どうぞお忘れなくご連絡を戴きたいと思います。又「香葉」は会員の唯一の交流の場でもあります。投稿によって、どんどん利用して戴きたいと思います。現在の学校の情報も提供しております。必ず公告しております総会のご案内に目を通されて、講演会や行事に、是非参加して下さいますようお願いします。私自身、香葉会をお手伝いして、三人の学長、相川先生、林先生、下田先生とお交わりを戴き、ご協力を戴きました。この八月に任期を終えられた下田学長に代り、九月から小玉敏子先生が新学長になられました。先生が短大に初めていらした初々しいお嬢さん時代から存じ上げている私は、改めて短大の四十数年の歴史と、その発展に感無量の思いがあり、こゝまで香葉会を守り育てて下さった学長各先生方、学校当局の皆様に改めて感謝の思いで一杯です。長い年月、委員の皆様と共に、ここまで支えられてきた私も、すでに世代交替の時期がきていると思っております。香葉会の発展のために、会員の皆様の自薦、他薦によるフレッシュな協力を、心から期待しております。

下田先生、ありがとうございました。

林先生の後を受けて四年間、学長として活躍された下田先生は、去る八月三十一日を以て、任期満了で学長職を退かれました。香葉会は常に、学校側と連携を保って、学校のよりよき発展のために働くことが、役割の一つと思っておりますので、お忙しい学長をお訪ねしてはご相談することも多かったのですが、いつも暖かく迎えて下さって適切なアドヴァイスを戴き、多大のご協力を戴きました。お世話になりましたことを、深く感謝して御礼申し上げます。ありがとうございました。

（短英一）

学長就任にあたって

学長　小玉敏子

このたび、下田哲先生の後を受けて、学長に就任することになりました。現在の本学の状況、将来の課題、短期大学設置基準の大綱化による制度の弾力化と本学の特色づくり、自己点検・評価の実施など、山積する問題を前にして責任の重さをひしひしと感じております。

昭和四十二年三月、相川高秋大学長兼短大学長からお電話を頂き、兵藤正之助先生が大学に移られるので、四月から短大主事を引き受けるように、とのお話がありましたときは、突然のことでもあり、困惑いたしました。ゲッセマネにおけるイエスの祈りを思い出し、「神様、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい」と祈りました。私にとって幸いなことに、翌年十月、専任の学長として林淳三先生が就任されましたので、短大主事としての私の在任期間は短く、間もなく肩の荷を降ろすことができました。当時の私には「御心のままになさって下さい」と、祈る心のゆとりはなかったような気が致します。二十五年あまり経った今になりましてようやく、「御心ならば、最後のご奉仕をさせて頂きます」といえるようになりました。

私が大学に入学しましたのは昭和二十五年ですから、短大の一回生と同級ということになります。女専の方たちは先輩格で、その何人かの方たちを、三春台のキャンパスや黄金町からの通学路でお見かけ致しました。横浜大空襲で校舎を失った捜真女学校が関東学院の三春台校舎で授業をしていたからでございます。このような事情から、その頃のことに興味をもち、『関東学院百年史』に「女子短期大学の歴史」を書きましたとき、初期のことを出来るだけ詳しく調べて書きました。関東学院における女子教育開始の状況を自分なりに把握し、記録に留めておきたいと思ったからでございます。

空襲で焼野原になった横浜のわずかに残された校舎に、相川先生がご苦労を重ねられながら創設された女子専門学校が、林淳三先生、下田先生はじめ多くの方々のご努力によりまして、今日の総合短大に発展いたしました。現在の短大をさらに充実させるために、微力ながら、私も努力させて頂きたく存じます。

下田学長は、本学の入学案内に聖書から「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである。」を引用し、「キリストの名によって、キリストを土台として建てられている本学の真の価値は、この『隠された宝』にあります。二年間の本学における勉学によって、知識・教養・技術・資格という収穫だけでなく、この『宝』を、真理の探究者である学生の皆さんが、求め、掘り起し、見出すことを望みます。」と書いておられます。わずか二年の在学期間に、この短大の学生らしいカラーを身につけて卒業するというのは難しいことかもしれません。しかし一人一人の学生が自分にとっての「宝」を見出して、あるいはそのきっかけをつかんで、卒業してほしいと思います。そのために私共教職員が、何らかの役割を果たせれば幸いと存じます。同窓会の皆様のご協力も必要でございます。よろしくお願い申し上げます。

女専のページ

チャ子との別れ

佐藤久子

「膝はよくなったのですが、昨年十月体調くずし入院、暮に退院しましたが目下自宅療養中です。あちこち痛い人の方が元気ですネ御健康を心からお祈り申し上げます。」正月四日着の賀状のこの添え書きが、竹村久子さん（英一）の絶筆となった。すぐ電話したが、咳がひどく会話も苦しそうなので、その後は手紙にしたが、わずか一月余り後の平成四年二月十一日朝、六十二才の生涯を閉じられるなんて思いもしなかった。御本人には告知されていなかったが急性の肺癌だった由。昨年夏過ぎ咳が出始めるまで何の異常もなく元気一杯で、私達グループで六月に会った時はいつもの明るいチャ子だった。だから訃報に接した友人達には大きなショックだった。

竹村さんは横浜の富島運輸に永年勤めて総務課長の重責を果たされ、定年後は同じ系列の富島商事の取締役となって、新しく資格を得たり、取引に必要な英語の勉強もしていて、颯爽と充実したシングルライフを送っていた。若々しくタフで、控え目乍ら意志は、はっきり、つきあいのよい何でも安心して云える人柄で、誰にも好かれ彼女の陰口は聞いたことがない。香葉会の年度委員もされ、級会も皆出席、女専三十年の記念会を三春台でした時も快よく会計一切を引受けてくれた。

思えばドライブや、スキー、ゴルフ、海外へ共に旅した国も九ケ国に及ぶ、鎌倉の空も一緒に飛んだ。かゝわりの深い友を失った悲しみと、偲ぶ思い出は限りない。

忘れ得ぬ友チャ子！あなたとの別れに「現役で皆に惜しまれて逝ったチャ子の一生は、華の生涯だった。」と云っていた安沢みねさんの言葉を贈ります。

鎌倉を愛したチャ子は「梅誉香岸妙久大姉」となって、逗子マリーナに近い正覚寺に眠っている。

ニュージーランドにて
久子同志

（女専家一）

クリスマスディナーショー

小泉すみ子

〝お疲れ様でした。正面入口はあちらです。〟とドゴール元師がかぶっていた様な帽子をかぶり、銀モールの縁どりの制服に身をつゝんだボーイさんが車のドアを開けてくれた。高いポールの青白いライトに照らされて、広々とした駐車場には、色とりどりの外車がゆったりと止まっている。世田谷から二時間半もかゝった高速道路の渋滞にいらいらしていた気分は一べんにハイに変る。やっぱり来てよかった！

かねてから一度行ってみたいと思っていたディナーショーである。年末多忙は主婦の一番の理由になるものゝ、やっぱり二人分で十万円（ディナーショーは一人では様にならない）という経済的理由に優先されてなかなか機会がなかった。それが急にチケットが二枚手に入ったのである。時は九十一年十二月二十一日、所は東京ベイホテル東急、出演者は外国のボーカルグループのブラザース・フォアとの事、本当は五木ひろしとか和田アキ子がいゝんだけれどとチラッと思ったが、今はそんな事は云えない。息子にエスコートを頼んで出かけて来たのである。

美しいクリスマスデコレーションを横目に、メインホールは十人程で囲むテーブルが五十卓も入っているのだろうか。パーティドレスで着飾った人々で満席である。型どおりのフランス料理が手際よく運ばれて、デザートになった頃、舞台の上にブラザース・フォアの方々が楽器を手に拍手に迎えられて入場して来た。挨拶に続いて見事なハーモニーで数々のレパートリーが披露される。そのうち〝この曲聞いた事がある〟もろ人こぞりて…百十二番の讃美歌ではないか。続いて百十一番、百三番、等々、英語で歌われる美しいメロディは私をして一気に四十数年前の関東学院の聖歌隊だった頃に引ずりこんでしまったのである。聖歌隊は女専英一と英二との二十人位で編成されていた。クリスマスの頃になるとタッピング先生に引率されて、進駐軍のキャンプ、P・X、チャペル、ゴルフ場のクラブハウス等、よく歌いに行ったものであった。こわれた教室の窓ガラスから降り込んでくる雪に、腰に巻いているオーバーでは寒さが防ぎきれず、とうとう授業が中止になってしまった頃の話である。迎えのバスに乗って基地に着くと、ドア一枚で中は集中暖房のきいた別世界、戦勝国アメリカというより、私達にとってはもう夢の国というほうが当っていた。集まっている人々は、プレスのきいた制服姿の軍人達であったり、黒いエナメルの靴をはいた子供達であったり、ロングドレスを身にまとった女性達であった。絹のストッキングが高価で、修理に出して使っていたころの、ロングドレスは外国映画の中の映像でしかなかったのである。

歌う事は大好きだから楽しい事であり、自分達の貧しさより、知らない文化に接する事が出来た驚きは何にも替え難いものだった。

聖歌隊としての歌が終るとリフレッシュメントと称してお茶を用意して下さった。それも又楽しみのひとつであった。ある時クリームサンデーが出された事がある。現代外来語辞典で引くとサンデーとは果汁や果物にクリーム、アイスクリームを添えたもの。もと米国で日曜日に売られた事からこの名がついている、とある。人工甘味料で作られたアイスキャンディがせいぜいの頃、それは経験した事のない味であった。ひと口、ひと口、たゞだまって食べるだけ、上にかけられているピーナツの粒といゝ、クリームの香りといゝ、これをサンデーと云うのかと。頭の中は一ぱいになってしまった。あまりの静かさにサービスして下さったアメリカの兵隊さんが、〝みなさんの口に合っているのでしょうか〟とタッピング先生に聞かれた程である。先生は、〝生徒達は非常に満足していますよ〟と答えておられたのを覚えている。先生が私達を引率して行く時、必ずおっしゃった事は、〝貴女達はカレッヂの学生であるという事を忘れずに、聞かれた事は美しい英語ではっきりと答えなさい。〟であった。三人称単数現在にはSをつける事。疑問文の時の助動詞、thの発音、Thank youの後にはforをつけるとか私の頭の中は英語の先生方の顔又顔であった。それにもかゝわらず、その時は誰一人として言葉を発することが出来なかったのであった。

ディナーショーの舞台は〝きよしこの夜〟がリフレインされた。私ははっきりと、Silent Nightのtの発音を入れてアルトのパートを力いっぱい歌った。

〝神様ありがとう。ブラザース・フォアを通してあなたは私に〝女専時代〟をプレゼントして下さったのです。本当に有り難うございました。

眼鏡は曇って何も見えなかった。

（女専英二）

定年の時を迎えて

松本久子

私は短大での、勤務を三月三十一日で終了いたしました。短大の前身の女子専門学校に勤め始めてから、四十六年という歳月が過ぎ去りました。私自身随分長い間勤めたという実感は、職場を離れた後歩んで来た道を振返った時しみじみと感じました。勤務中は喜んで勤めておりましたので、長いと思ったことは殆んどありませんでした。公私共に卒業生の皆様や、教職員の方々のご援助とお支えに寄って無事に退職の時を迎えることが、出来たことを心から御礼申し上げます。本当に有難うございました。

いま、素晴らしく発展を遂げた、女子短期大学は戦後昭和二十一年に荒廃した、横浜三春台の地に女子専門学校として産声をあげました。その後学制改革、校地移転、そして学科の増設と、学校当局と教職員、卒業生の皆様の弛まない努力により、今日のような短期大学の姿が、六浦の地にあるのだと思っています。

思えば、十九才で関東学院に勤めました私は、四十六年間の前半、後半を事務室（庶務課）に中、二十年間を図書館に勤務いたしました。三春台校地の十年間はまことにのんびりと勤務の傍ら、好きな授業に出席させていたゞき勉強させていたゞきました。子供だった私は仕事が主か、勉強が主か分らない位、楽しく本当によい時を送らせていたゞきました。

昭和四十年代中頃から、世界的に起った学生運動の影響をうけて、大学短大の学校当局の教育意識の変革は、よきにつけ、悪しきにつけて大きく学校の内外を変えて行きました。当時、短大も大学構地から、隣接の室ノ木校地に移転し、独自の個性ある教育に徹して行くことになり、地に足が着いて来たのでした。私共も意識変革を迫られた十年間だったと記憶しています。

長かった関東学院勤務の中で、移り変っていく社会と、その中での学校の変遷を、片隅でみて居て思いますことは、基督教主義による教育の揺ぎない精神が、いつの時も、現象が如何であれ変らないことは本当に嬉しいことだと思っています。私を育てゝくれた学校に、そして皆様に心から感謝申し上げます。

この度、定年退職にあたり香葉会会長の古城房子さんから、退職後香葉会のお仕事を、お手傳いしてほしいとのお話があり、喜んでお受けしました。週一日、月曜日に香葉会室に出勤しております。卒業生、教職員の皆様の連絡や、名簿についての問合せ等、お申越し下さい。お役に立ちたいと願っております。懐かしい卒業生の皆様、教職員の皆様の、お顔を思い浮かべながら誌上をかりて、一言ご挨拶申し上げます。ご健康でお過ごし下さるよう、お祈りいたします。

「松本さん、ありがとうございました」

松本さんは短大の成長と発展の一端を荷ってこられ、香葉会にとっても、貴重な、生き字引的存在でした。多くの助言とご協力を戴き心強い応援団でした。長い間、本当にありがとうございました。今度、香葉会をお手伝い戴くことになりましたが、住所追跡調査や整理に期待以上の成果があがっています。これからも香葉の仕事をご一緒にできることを嬉しく思っております。

（古城記）

覚え書（十九）

上市二郎

毎月短大月報が学校から送付される。平成四年（一九九二年）度の在校生の総数欄をみると一九五七名（英文四五八名、国文三九一名、家政五七二名、幼児教育二七九名、経営情報二五七名）と専攻科一五名となっている。年次を追って進めてきているこの覚え書きの時代は、英文科、家政科、英文科第二部の在校生総数が、昭和三十一年度二九五名、同三十二年度二二六名、と学生数の最低の頃であった。本年は短期大学（以下短大）制度に移行して既に四十二年の歳月が流れ、大学の教育課程も幾度かの変遷を経てきており、先年一般教育のあり方も考えなおされていることなど紙上で知ることができた。また、聞くところによると短大卒業生は総べて準学士の称号をつけるように変ったとか、短大で取得した単位は四年制大学へ、そしてその実力に応じて大学院までも進むことが出来るようになったとか、色々耳にすると年と共に充実発展してきた短大も確実に地盤を固めて、社会に貢献していることを大変嬉しく思う次第だ。

昭和五十九年秋学院の百周年記念行事の折、短大の教職員全員で撮った写真は百名以上の方々だった。丁度手元に昭和三十一年春の教職員の写真があったので掲載して参考に供したい。

さて、前号では昭和三十一年、夏の行事などから始める予定だったが、少し紙面を割いて二、三年に亙る事柄について書く積りが思いの外字数が増えて与えられた頁を全部使い果たしてしまった。そのため今回少し戻ったり重複する箇所もあるが年月の順を追って記述する。夏の行事の最初は、この頃の恒例の校内合唱コンクール、七月四日(水)第一、二時限の授業を終って全員講堂に集まり、日頃の熱心な練習の成果に花を咲かせる場として各クラス対抗で競いあっていた。これが終るといよいよ長い夏の休暇に入るのが習わしであった。そして、翌七月五日(木)から七日(土)にかけて伊豆の天城山荘で宗教部主催のリトリート（修養会）が行なわれている。これは英文・家政両科一、二年有志で四十四名の参加者があった、と記されている。この時の主題は「時と永遠」―いかに生くべきか―講師は相川高秋先生が担当していた。その外指導の先生方は柳生直行、檜垣好子、安藤寿々代の諸先生などであった。出発の日は現在とは異なり直接横浜駅東口に午前八時過ぎ集合して点呼を受け九時過ぎの列車で三島駅へ、ここで伊豆箱根鉄道に乗り替えて修善寺駅へ、駅前から東海自動車の貸切で天城山荘に向ったものだ。途中の道路も砂利道で埃を巻き上げて走る時代だった。記録をみると当時の費用は宿泊費、交通費を合せて壱千円となっていた。

続いて英文・家政両科の夏期講習が始まった。英語の講習会は七月九日(月)から二十八日(土)にかけて開かれ、午前九時の部会話文作科（担当者は光畑愛太、柳生直行、大下繁喜の諸先生）と、同十時三十五分の部英文学科（担当者は相川高秋、小滝奎子の両先生）とで毎日午前中で終った。一方、家政講習会は七月十六日(月)から二十八日(土)までの二週間で午前九時から午後四時まで、和裁、洋裁、調理、染色、手芸の五コースに分けて行なった。講習会の単位は平常授業の単位に算入されるということもあって暑い毎日学生は

熱心に出席していた。また、英文科第二部も英語講習会が七月十六日(月)から八月四日(土)にかけて開かれた。英文学科（担当者柳生直行、小玉晃一の両先生）午後五時四〇分の部と、文法作文科（担当者光畑愛太、小玉晃一の両先生）午後七時十分の部とで開講された。特に第二部の学生は昼間種々の職業に従事している関係上、平常の授業も仕事の都合で止むを得ず欠席する者もあり、このような機会が大変貴重な時間となっていたように感じた。

七月も終わろうとする頃、英文科第二部の学生は葉山の霊翠館を使用して二十八日(土)から一泊で修養会を行なった。親睦を深め、学院の歴史を知り学院精神等について語り合う場を持った。指導者は相川高秋、柴三九男、光畑愛太、小玉晃一の諸先生方であった。

八月に入ってからは英文科第二部の学生の希望で、一日(水)から四日(土)にかけて上高地五千尺旅館を基点にしてキャンプに出かけた。光畑愛太、兵藤正之助両先生の外に旧教員の門根静子先生も特別参加され、企画面や種々手配手続き等に当られていた。費用は二千四百円だった。

九月十九日(水)の教授会で永野敏子先生を後期から専任講師として迎えると相川部長から報告があって、十月から先生が就任された。後の小玉敏子先生で現在短大で活躍しておられる。

十月に入ってから坂田院長より短期大学の建物を積極的に計画してみてはどうか、と云われ、第十九号でも述べたように短大の城なるものが是非欲しいとの教職員の達ての希望もあったので、「短大の将来を思い先ず教室棟なるものを約二千万円位で鉄筋三階建を考えてゆきたい」と相川部長が述べられ、各科でも検討するように云われた。然し具体的に建物の案が出されたのはそれから五年位後のことであった。

十月十一日(木)から十三日(土)にかけて、英文・家政両科二年生の卒業前リトリートが嵯峨沢館で実施された。この場所を使用するのは初めてである。天城山荘へ行く途中で、嵯峨沢にたった一軒しかない木造三階建の静かな温泉旅館で狩野川上流の川沿いにあってせせらぎの音を聞きながらゆっくりと憩いのひとときがもてる宿だ。正確なプログラムは覚えていないが、宿に到着、ひと息ついて開会礼拝に始まり夕食、夕拝を済ませて学生の親睦会で初日が終る。部屋に落ち着いて窓辺から眺めると、対岸の川辺には所どころに立っている薄紫色の誘蛾燈が流れる川面に薄い紫の色を浮かべて幾重にも揺らいで観え、時の過ぎるのを忘れさせた。夜空に緩やかな山々の稜線がうっすらと大きく弧を画がいていたのを想い出す。次の日は庭で朝拝、朝食後二階の広間で相川高秋先生の講演「学院小史」―関東学院精神というものを中心に―があって、午後のリクリエーションの時には近隣を散策する者、裏の川原で釣りをする者（鮎の収穫は？）、ゲームを楽しむ者などなど…。夕拝を済ませてからは卒業後の人生への指針について各先生を囲みグループに分かれて語り合ったのではないでしょうか。最後の日は正午近くに閉会礼拝をもって終了した。このリトリートには学生五十四名教職員十三名と

記されていた。坂田院長もこの嵯峨沢の集りには参加され大変ご満悦であったこと、或る時は帰りのバスに迂回してもらい修善寺を見学してから駅へ向ったことなどを思い出した。この静かな木造の館も狩野川台風の折、伊豆の山々からの増水によって川筋がすっかり変えられ、建物も総べて濁流に飲まれて跡形もなくなってしまった。と云うことは本当に残念なことだ。

短大祭も現在のような規模の大きいものではなく、当時は宗教講演、文芸講演、演劇や英語劇、クラス対抗のバレーボール大会、夜の英文科学生との交歓会（交歓会は昼の学友会が茶菓の準備をして体育担当の教員の指導のもとにスクエアダンスやゲームなどが行なわれ、昼と夜では顔を合わすことのない学生に取って良い機会だった）なども加わっての祭りだった。この年は十一月十六日(金)十七日(土)に開催。このような計画も学友会で案を作り拡大委員会を開いて種々相談した。前にも述べたが拡大委員会には学友会役員の外に各クラス委員及び文・体連の役員、それに役職にある教員が加わり種々の話し合いの場とし、短大は二カ年のため過去の流れ、経緯について学校側から色々とアドバイスしたのである。当時は特に大学キャンパス内に共同生活しているような小さな短大では止むを得ないことだった。そのようにしなければ大学の自治会に短大の学友会が巻き込まれて、大学も短大も同じ学校のような扱いを受けることが度々あった。大学のサークル活動も部員を獲得するのに短大生にまで声をかけ勧誘する時代でもあった。またこの頃自治会のサークルとしてなのか、大学新聞が発行されていた。学友会に対しても購読料として分担金の形で請求されたとか、反面短大ニュースは仲々掲載されなかったとか耳にした。大学同窓会（榛葉会）からも資金援助して紙面の一頁が会報に与えられていたが、何時しか半頁にされたとか聞かされたのを思い出したが、仲々難しい時代だった。

十二月を迎え短大協会主催による学生補導者研究会が六日(木)から八日(土)まで、京都産業能率短大を会場として開催された。槍垣好子先生の代りに出席することになり、急遽出張したのを思い出した。冬の京都は実に寒い。現代のような便利な新幹線もない時代、京都までの独りの長旅には？いささか閉口したが良い勉強になった。

昭和三十二年一月二十七日が日曜日のため第三十八回学院創立記念式典が二十六日(土)に行われた。今回三春台が当番で恒例の教職員記念祈禱会を塔のある校舎三階小講堂で行ない、記念式典はグレセット記念講堂で挙行された。この折短大生も四十名近く出席していた。式終了後昼食会が開かれ、年一回この日に全学院の教職員が顔を合わす機会でもあり、懇親のひとときがもたれた。

寮生活をして巣立った卒業生も大分多くなってきたのでルツ寮の同窓会を作り卒業後も親交の場を持ち続けたいと名称をルツ会とし二月設立総会を開き種々取り決めを行なった。

ミス・コールダが三月初めに帰国されることになった。英文の学生達に大変親しまれ、天城山荘の会にも参加され、また自宅を開放してのバイブルクラスは学生にとって深い印象を与えた。短大主催の送別会を二月二十七日(水)午後二時から一号館二階の院長室で開いた。相川部長の挨拶、皆との雑談のあと短大からの贈物「きもの」を手渡され崩れるような笑顔で、早速包から品物を取り出して広げ、袖に手を通してみせている先生の笑顔と和服姿のミス・コールダを今でも忘れられない。

お元気ですか？

現況、むさし野にて

柴　三九男

『香葉』もだんだん内容も豊、五月会での美味など故柳生や老生も美味羨ましく思う。お年寄を世話して下さる私信にもなるほどと感心するのが現況です。遠来の男性の卒業生の珍客も楽しいが手土産など不要どうぞ来て下さい。旧師会津八一の遺業をつぎ、法隆寺論から聖徳太子の現代的解釈、『大学キリスト者会紀要』に書きました。故柳生君もびっくりするでしょう。太子は「和の人」というより「平和」主義者、天皇家で信仰の自由を立てた人。明治以来の法隆寺論も一応終戦と自賛。最近発掘の「藤ノ木古墳」も太子の母上の弟たちの陵と判明。あまたみし、てらにはあれど、あきの日にもゆるいらかは、今日みつるかも『鹿鳴集』、むさしの十年、しかし鳥もいます、朝、ウグイスの声も聞きました。

学園町、さくらふぶきのあとのある隣の家にボタンザクラ美しく咲く。曽宮一念『書家廃業』（静岡新聞社）の「ひなぶり」にならって、盲人の書家、乞一読、白寿。大学は明日を注意せねばならぬ。

音楽と友に

安藤寿々代

昭和十五年以来続いている、横浜フラウェンコール。毎月第二土曜日の夜、楽しい会食と共に関東の卒業生、捜真の卒業生と楽しく歌っております。

又、教えるばかりではなく、週二回はダンスのレッスンに通っています。リズムに乗り、ステップを踏むのも楽しいものですね。

その私でも平成元年には、大腸ポリープの手術をし、三〇センチもの腸を摘出してしまいました。その分少々痩せたでしょうか？

毎年夏には、娘孝行と避暑を兼ねて、カナダの方で三ケ月間（七月から九月まで）をすごしています。カナダでエネルギーを十分に充電して、日本に戻ってくるのです。

今年は十二月十一日にクリスマスディナーコンサートを予定しています。歌あり、ダンス（写真のような）ありで楽しいひとときを皆さんで過ごしてみませんか？

音楽を友にますます元気です。

（国文七　葛城記）

関東学院と私

小滝奎子

関東学院短大――これは私の心をなつかしさで一杯にしてくれる存在です。若き日の私は十年にわたってここで育てられました。先輩の先生方からも、妹たちのようだった学生の方々からも、教えられ成長させていたゞきました。

昭和二十二年（!!）に旧制大学を卒業して関東学院女子専門学校に赴任して来た時、私は二十三才でした。旧制高等学校の教員免許は持っていましたから資格はあったわけですが、一個人としては全く未熟の固まりでした。時田信夫先生が新米教師の私に、教室に入るのは開始ベルと同時ぐらいでよい、授業を終るのは少し早めにとか、期末テストのペーパーの扱い方とか、細々と教えて下さいました。若かったせいもあって、その時は少々反発もしましたが、今はなつかしく感謝しています。

その頃ＩＣＵの開設がきまり学部創設に先立って大学院が開かれることになりました。当時の坂田院長が後押しして下さって、私は教職にあるままで二年間ＩＣＵの研究所に通いました。そこに集った方々は殆ど皆、立派な職場を放棄して来ておられ、信仰と学問との熱意にもえる雰囲気のなかで幸せな時を過しました。更にその後フルブライトの留学生として、この時も在職のまま、コーネル大学で学ぶ機会を与えられました。結局私は関東学院で育てられたということです。

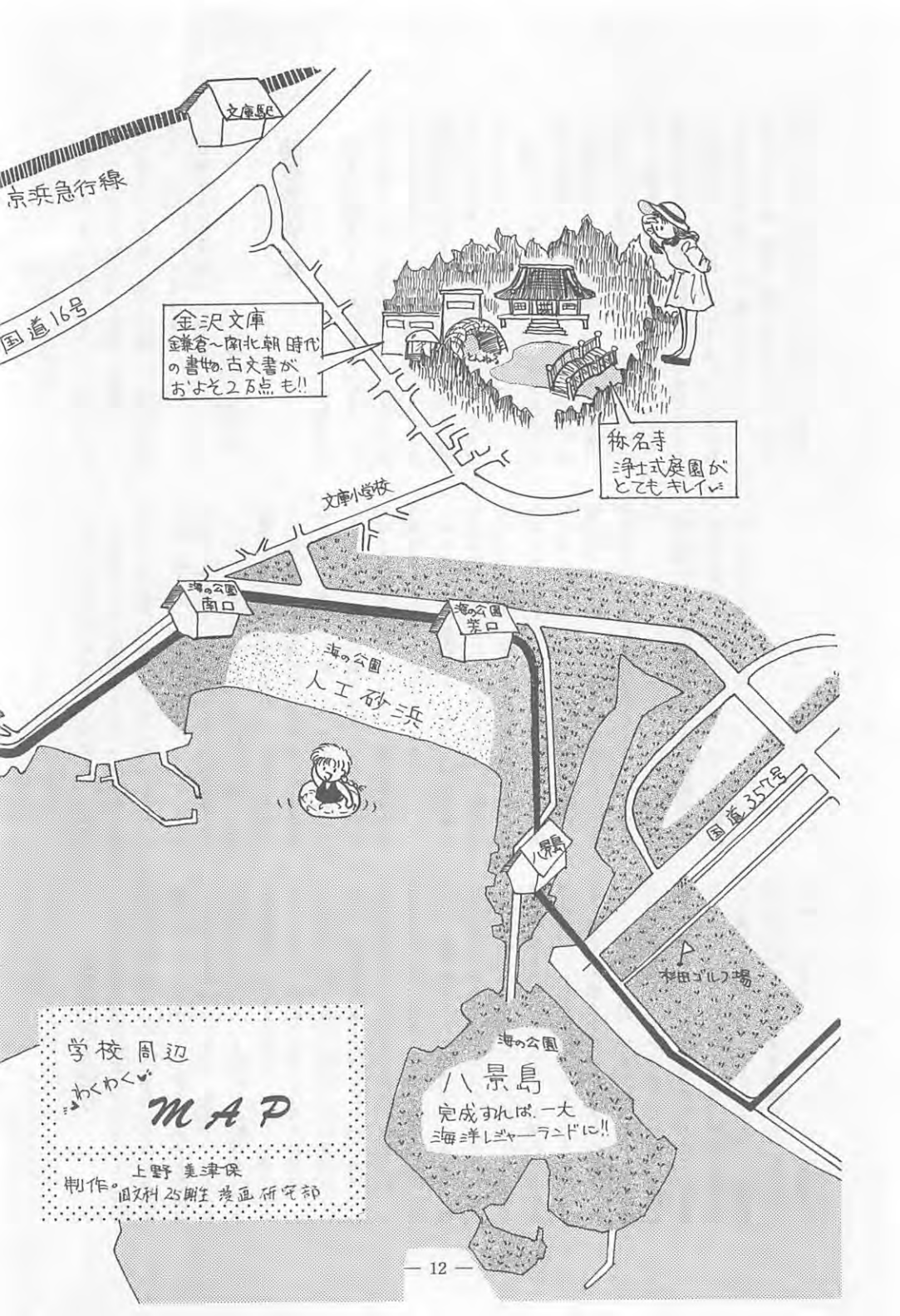
その後、夫の転勤でロンドン行きが決まり私も退職し異郷暮しとなりました。丁度六十年代シェイクスピアの演劇の最盛期で夢中で見てまわりました。一度退職した身で関東学院に再び戻れるとは思っていなかったのに、帰国後、今度は大学の文学部に迎えていたゞきました。短大にも非常勤として出講しました。

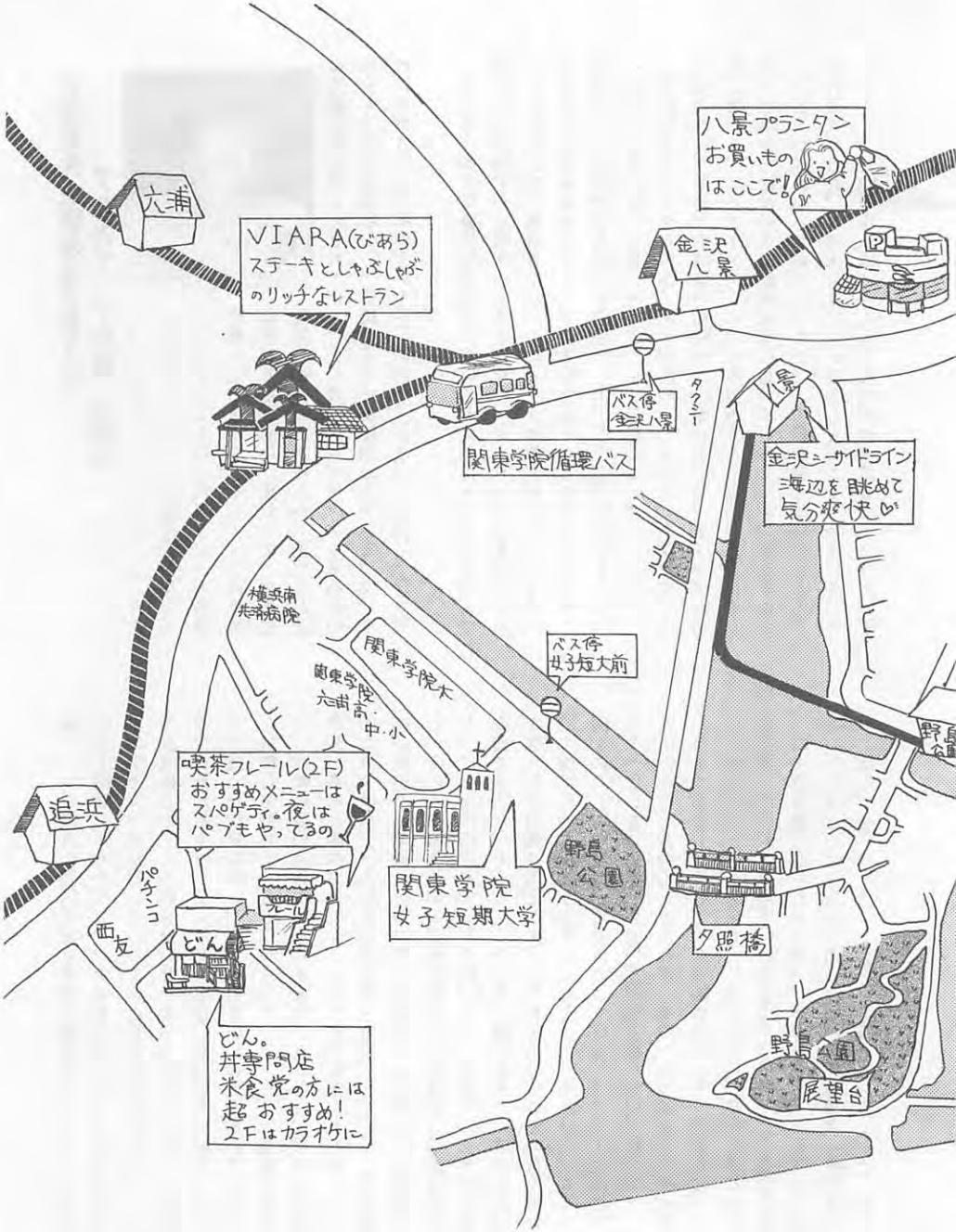
関東学院とともに過して来た年月は私にとって最高の恵みであったと、今しみじみと感謝している次第です。

合同同窓会便り

今年の合同同窓会総会は、六月二十七日、相生本店で開催。香葉会から七名の幹事が出席しました。会長は、六葉会会長の田野井氏が三期目を務められます。昨年十一月十四日幹事会が行われている席に、高野理事長ご逝去の悲報が入り、大変なショックを受けました。十六日、阿佐ケ谷のご自宅でお通夜、十一月十七日に、釜利谷校舎で学院葬が執り行われ、役員が代表で参列しました。多年にわたり理事長として学院の発展に貢献され、大学の釜利谷校、今春には小田原校の開校に至る迄、重責を負われての日夜のご苦労は、察するに余りあります。半ばにして召されたことは誠にご無念のことと、心痛みますが、み霊の平安をお祈りし、長年のお働きに心から感謝し、ご冥福をお祈りします。先生のご遺志を継ぎ、内藤大学長が新理事長に就任されました。本年二月、幹事会にお招きして、先生のお話を伺うことができましたが、学院に最もふさわしい後継者を与えられたことを感謝しました。今後も、理事長、理事の諸先生と意義ある会合を持つことによって、合同同窓会の学院の為の働きを明確にしていきたいと思っています。

（古城記）


文庫駅
京浜急行線
国道16号
金沢文庫
鎌倉～南北朝時代の書物、古文書がおよそ2万点も!!
称名寺
浄土式庭園がとてもキレイ
文庫小学校
海の公園 南口
海の公園 北口
海の公園
人工砂浜
八景島
国道357号
杉田ゴルフ場
海の公園
八景島
完成すれば、一大海洋レジャーランドに!!
学校周辺
わくわく
MAP
上野 美津保
制作。国文科2年生 漫画研究部


六浦
VIARA(びあら)
ステーキとしゃぶしゃぶ
のリッチなレストラン
八景プランタン
お買いもの
はここで!
金沢八景
バス停
金沢八景
タクシー
八景
関東学院循環バス
金沢シーサイドライン
海辺を眺めて
気分爽快
横浜南
共済病院
関東学院大
関東学院
六浦高・中・小
バス停
女子短大前
野島
公園
喫茶フレール(2F)
おすすめメニューは
スパゲティ。夜は
パブもやってるの
追浜
パチンコ
西友
フレール
どん
関東学院
女子短期大学
野島
公園
夕照橋
野島
公園
展望台
どん。
丼専門店
米食党の方には
超 おすすめ!
2Fはカラオケに

吉屋敬先生講演会を終えて
〝アルカディアの夢〟を想う

〝アルカディア、アルカディア〟なんと快いロマンティックな響きであろう。アルカディアとは古代ギリシャ人の理想郷であるという。そして、この世には現存しないもの、果たして、本当に現存しないのであろうか。先生のお話に次第次第に吸い込まれていく。先生は、アルカディアを求め心の旅をするのにふさわしい、清楚なそして神秘的な方である。又、それはお描きになる絵の中にもよく表われているのではないだろうか。

先生の一番上の歯科医をなさっているお姉様がロスアンゼルスで開かれる歯科学会に出席することになり、ヨーロッパにも行ってみたいとのことで、患者さんの一人にオランダの方がいらっしゃり、その方のお推めもありオランダの方(はう)にも行くことになったということだ。そのお姉様のお誘いに先生は一も二もなく飛びついたそうだ。それが一九六五年の九月、先生が二十才の時のことだ。

ではなぜオランダなのか。その理由の一つとして、小学校五、六年生の時に、前述のお姉様の病院の待合室にあった、オランダが輩出した天才、ピーター・ブリューゲルの画集との出会いだったそうだ。当時から絵が好きで絵画教室に通っていらしたが、絵描きになるかどうかはわからなかったそうで、この絵を見た時はおもしろさに引き入れられ、目の上のウロコが落ちたとおっしゃっている。そうしてもう一つの理由は、一八歳の時に小林秀雄著の「ゴッホの手紙」という優れた評伝を読み非常な感銘をうけ、ゴッホという人に初めて開眼したそうだ。ゴッホはもちろんオランダ人である。その本の中でゴッホが書いている文章と絵を見比べながら、ゴッホがどんな気持ちで、その絵を描いたかを知るにつけ、ゴッホに深い興味を持たれたそうだ。そして又、直接の動機は若い娘がいだく、ゴッホの吸った空気を吸い、ゴッホの歩いた石畳を歩いてみたいといった純粋な気持ちだったと回想されている。そして最後の大きな理由は、終戦直前の昭和二十年、生後四十九日目に、横浜から宮城県の草深い寒村に疎開されたが、そこで戦火を逃がれた古いアルバムの中に見つけた、一人の女性の写真との出合いだった。その写真には、帽子を被り、素敵な冬のコートに身を包んだ美しい女性が写っていた。その人こそ先生のおば様にあたる、作家の〝吉屋信子〟だったのだ。その女性の佇んでいたのは、フランスのリュクサンブル城の門の前であった。そして、この写真に魅せられた六才の少女は、写真を唯一の心の拠り所として、いつか私もおばさんの佇んでいたあの門の前に行ってみようと決心したそうだ。それは又、ヨーロッパの国々に対しての憧憬と希望になっていった。又、先生はこうもおっしゃっている。〝おばから精神的に受けたもの、私がオランダに行くことになったのも元を正せば、その一枚の写真との巡り合いだったからであるし、そして大きな絵描きになろうとしたのも、おばがいたからではないかと思う。〟と。まさに、草深い寒村でみた一枚の写真との出会いで先生の一生は決まったといっても過言ではない。

二十歳の時に訪れたヨーロッパへの旅立ち。そして又、オランダという国はどのような国であろうか。先生の著書「楡の木の下で」の一説に、〝窓〟というページがあるのだが、この中でこうおっしゃっ

ている。

『窓って不思議だ。百年ちょっと前まで、外に向けて閉ざされていた日本の開いた窓は「出島」だった。当時の新しい知識に飢えた日本人達は、「スパイ鏡よろしく古びたレースのカーテン（？）の陰で、息を殺して貪るように通り過ぎる通行人—ヨーロッパの諸事情—を眺め一挙一投足を習得していったのだろう。（中略）「出島」こそ日本の「知識」の窓だった。昨年は日蘭修好三百八十年に当たったそうです。』

そうなのだ。鎖国をしていた時代、唯一、貿易が許され外国の息吹きを感じることができたのが、中国とオランダであり、オランダとは縁が深い、遠くて近い国であったのだ。こうして先生のオランダでの生活は始まっていった。そしてオランダに対する興味深いお話がどんどん続いていく。

オランダは水利工学が大変発達しており、「世界は神が造り給うた。しかし、「オランダはオランダ人が造った。」という諺があるくらいの優秀さだ。日本ならさしずめ〝土地〟を売るのだが、オランダでは〝土〟そのものを売るという。水に囲まれたオランダでは土地は大変貴重なものなのだ。そして厳しいまで、環境を守っていくという考え方を貫いている。又、公の機関との交渉も「はぁ、左様ですか。」といってすぐにあやまるのではなく、互いに交渉しながらお互いの妥協点を見つけて生活していく。こうした処世術がオランダでは必要であるという。そして、オランダでは国籍を取得していなくても選挙権が得られるようになり、先生も四十五才にして初めての投票ができ、感激なさったそうだ。オランダに出稼ぎに来ている、ベトナム、ギリシャ、モロッコ、トルコなどの人々にも投票権を与えているところがすごいとおっしゃっている。

オランダという国、あるいはオランダ人に慣れたからといって非常にオランダが好きかというと、八十パーセントは大変好きな国、好きな国民であるが、残りの二十パーセントはなかなか一筋縄ではいかない国民だという。スーパーなどのサービスの精神などは、日本の方が優っているそうで、「どうもありがとう。」という言葉はまず聞けないという。閉店時間が一分でもすぎると、もう販売はしてくれない。自分の勤務時間の方が大切だという合理的な考え方だ。

先生は又、こうおっしゃっている。〝だからだといって、私がオランダ嫌いというわけではなく、ガレージのことで村役場とトラブルが起きているが、役場との交渉の中でも、そういうことをして生きていくと、自分の足が地についていて生きているのだ。流れに流されないで自分で生きているんだという実感が私自身にとてもあるのだ。〟と。この言葉が大変興味深い。

先生はオランダ、イコール、アルカディアだ。オランダの政治がアルカディアを実現させたとおっしゃっている。そして、それは人間一人一人の心の中の意識の中にあるのではないかともおっしゃっている。そうだ、まさにその通りなのではないか。

連綿たる人類の歴史の中で、人間一人一人が、自分のアルカディアを見い出そうと、無意識のうちに日々暮らしているのではないだろうか。そしてそれに、一歩でも近づくつもりで。そんな思いがした一時だった。

〝アルカディア、アルカディア〟なんと快い響きだろう。そしてそれは、人々の願い、永遠の響きなのかもしれない。

要約　岡崎敬子（国七）

☆コーヨースポット☆

或る家族

中島理恵

私の大切な人々について、これから話を始めようと思う。と言っても、私にとってのその人々とは、私の家族も含め、この地球に生命を持つ全ての人々とも言えるのだが…。では、特に、私がアメリカに在住中に出会った、とてもホットな人間達について話をしよう。

ニューヨーク・ラグアディア空港に着いた私は、いつになく興奮していた。当り前である。なぜなら私は、アメリカに二年住んでいると言えども、ワシントン州シアトルから大して外に出たことがない、単なる田舎者だったのだから。当時通っていた、シアトルにある短大の友人達も、その多くは、ニューヨークへは一度も行ったことがなかった。

「とにかく、ニューヨークは怖い所だよ、リエ。犯罪は多いし、それに東の奴らは、ちっともフレンドリーじゃないからね。」

私は、食わず嫌い、は嫌いである。友人のありがたい忠告など、馬の耳に念仏であった。が、いくら私でも、全くの一人旅は、ニューヨークでは危険であると判断し、そこで、画家をしている友人の知り合いを紹介してもらうことにした。それが、ケン・ヴァイタイティスと知り会うきっかけとなった。

話は戻るが、私がラグアディア空港で興奮していたのは、未知の土地にだけではなく、まだ直接会ったことがないケンに対してでもある。何しろ、ケンに関する情報と言えば、〝才能はあるが貧乏な芸術家〟ということと、〝悪魔にそっくりの顔を持つ〟ということだけだったので。〝悪魔にそっくり〟という、フレーズが気になるが、物価がべらぼうに高いニューヨークで、宿代がタダで、おまけに失業中のケンがどこでも連れて行ってくれるというのは、私に、即ニューヨーク行きを決心させた。

空港でケンを見つけ出すのは、想像以上に容易であった。友人のことばは、本当だった。彼は、白髪混じりの背中まである長い髪と、これまた長い髭をたくわえた大男で、真っ黒いサングラスと、どこでも売ってそうもない帽子とジャケットを身に付けていた。短い挨拶を終えると、私達は、すぐに、クィーンズにあるケンの家へ向かった。

ケンの家は、労働者階級の人々が多くを占めていると思われる、あまり綺麗とは言えないような住宅街の一角にあった。その家で、ケンは、母親のケイと妹のキャシーと一緒に暮らしていた。ケイは、七十才を越えた、しかし非常にお洒落で、キュートな老女であった。キャシーは、体格のがっしりとした、そして、陽気な下町気質という感じ。家の中の至る所、ケンの創造的で宇宙的な不思議な絵がかかっていて、何とも言えない雰囲気。

その夜、ケンは自分の部屋を見せてくれた。

「ここにいると、楽しくって外になんか遊びに行きたくもないね。」

ケンは得意そうに言った。シンセサイザー、ギター、フルート、ステレオ、レコードがいっぱい、その他怪しげな物いっぱい。シンセサイザーを扱ったことがない私は、ちょっとそれで遊びたくなった。譜面台にあった楽譜をなぞって弾いていると、「楽譜は見ないで！目をつぶって、感性の赴くままに指を動かせばいいのさ。そう、そう。その調子。ほうら、すばらしい曲だ。」

私は、狂ったように、めちゃくちゃに弾きまくった。私の奏でる恐怖の音色は、ケイが、夕食ができたことを大声で知らせるまで止まなかった。

ケンとキャシーとブロンクス動物園へ行った時、私は、キャシーに驚かされた。彼女は

まるで子供のように、一つ一つの檻の前で動物達に話しかけるのである。あたかも、友達と話しているかのように。珍鳥ではあるが、醜い鳥の前で、「わぁ！あなた、とっても美しくってよ。なんて豪華な羽なの。すばらしい姿を見せてくれて、ありがとう。」と、やってしまうのである。この為、我々はかなり長時間動物園に居すわることになった。

私の愛するジョン・レノンの記念碑のあるストロベリー・フィールドは、セントラル・パークの一角にある。実を言うと、そこへ行きたくて、ニューヨーク行きを思いついた私である。連れて行ってくれたキャシーも、はしゃいでいる私を見て楽しそうだった。

「今日のリエは、すごく幸せそう。だから、私も幸せよ。…そうだ、ちょっとここで待ってて。」しばらくすると、突然キャシーは、馬車に乗って現れた。（もちろん、観光客用。）私とキャシーを乗せたその馬車は、優雅にセントラル・パークを回った。キャシーは、そこが私にとって、より印象的な場所になるよう演出してくれたのだ。

私の密かな楽しみは、深夜にケイと話すことだった。ケイは、毎日午後二時頃起きて、午前五時頃眠りにつく。それが、彼女には適当らしい。そして、誰もいなくなったテーブルで、一人でトランプを明け方までするのが日課なのだそうだ。だが、同じく宵っ張りの私がきてからは、二人で話して時間を過ごすことが多くなった。その会話は、いつしか戦争についてや、人種差別について発展していった。「戦争なんてのは、ごく一部の人達が勝手に私腹を肥やすために起きるのさ。大戦の時だって、アメリカ人にしても、日本人にしても、一般の人々に罪は無いんだよ。だから、昔のどの対戦国にも憎しみなんて感じてないよ。」「私はね、白人も黒人もインディアンも、みんな同じでなくていいと思う。どちらが上とか下とかではなく、ただ違うだけ。外見にしても、文化、習慣にしても。違いを認めて、お互いにそれを尊敬しなくちゃいけないよ。」

ケイの意見は共感できたし、この国の人々がこのような柔軟な態度でいてくれれば、とも思う。

ニューヨークでの最後の夜、ヴァイタイティス家全員と私は、ブロードウェイへ、レ・ミゼラブルのミュージカルを見に出かけた。すばらしい舞台だった。案の定、感激屋のキャシーは大泣きしていた。そして、予想外に、普段はクールなケイまでも涙で頬を濡らしていた。（後で、キャシーが、ケイの涙を見たのは初めてだと教えてくれた。）ケンは、と思って見ると、突然真っ黒サングラスをかけて席を立ってしまった。（何故だかわかりますよね？）

翌日早朝に家を出ようとしていた私を、みんなが見送ってくれた。絶対に午後にならないと起きないケイまでも。キャシーが泣き出した。

「また、必ず逢えるわね、リエ。」

「うん、きっと。」

それぞれとｈｕｇをして、私はケンの運転する車に乗り込んだ。

私のニューヨーク徒然草は、これでおしまいである。これといったテーマもなくこの原稿を仕上げてしまったが、何故私がこの一家のことを書いてみようかなと思いついたかを、何となくでも理解してくだされば幸いである。

（短英三十二）

新局面を迎えた女の時代のなかで

阿部典子

東京から新幹線ひかり号に乗って一時間、JR静岡駅のホームに降り立ったのは、約一年ぶりのことでした。静岡県建設業協会が主催するシンポジュウム〝自然と女性と建設業〟のコーディネーターとして出席するための訪問でした。

「やあ！お久しぶりです。今年もまたお世話になります。昨年の〝女たちのワーキングシンポジュウム〟は、その後大きな成果がありましたよ。」「どのようにですか？」「あの会合がきっかけとなって役所の事務手続きが改善されたんです。ある一定規模以下の小規模請負い事業に対する契約事務が簡略化され、役所に出す書類が大分少なくて済むようになったんですよ。」「そうですか。それは凄い成果でしたね。」

3K（きたない、きつい、危険）を代表する職場として、建設現場がよくひきあいに出されます。人手不足で若い男性の労働力が得られなくなり、多くの外国人労働者が汗を流す職場になりました。と同時に、建設現場にはエンジニアとして、アシスタント労働力として女性の進出もめざましくなってきています。

男の城から、男女が一緒に働く職場へと急ないきおいで職場環境が変化するのですから、さまざまな問題やトラブルが発生しても不思議ではありません。

静岡県建設業協会は、こうした状況にいちはやく取り組みはじめていたのでした。

さて、私は、現在、流通・マーケティングの調査・企画・教育・コンサルテーションを行う会社を営んでいます。まだ、設立して六年のかけ出しですが、日本の流通問題に一貫して関わってきて、三十年近くが経ちます。いま、こうして日本の流通の変遷を通して、日本の経済・社会のあゆみをふりかえってみるだけで、重ねし年月の重さをあらためて思い知らされる気がいたします。日本の流通問題は、いまや、世界経済をも揺るがす重大テーマとなっているのですから。

ところで、私は関東学院短期大学英文科十回生として巣立った後、横浜市立大学文理学部心理学科に学びました。一九六九年に同大学を卒業後、「流通経済研究所」という小さな研究所を知人より紹介され、ここに勤めることになりました。東京オリンピックが開催された翌る年の昭和四十年一月のことでした。流通ということばが、日本で使われるようになったのは、昭和三十年代後半ですから、私も、入所してはじめて、このことばを知ったほどでした。

そして、四十年代に入ると、企業にも行政にも流通に対する関心が高まって、昭和四十一年秋、この小さな研究所は通産省管轄の財団法人となりました。そして、私はこれより二十年の間、秘書、研究員、主任研究員、理事へとキャリアを積み、昭和六十一年春、理事の任期満了とともに退職しました。

「これからは、研究者としてではなく、ナマナマしく動いている市場経済の中で、事業家として生きたい。エネルギーのあるうちに次の仕事に挑戦しよう！」同じ六十一年の秋、前記の株式会社を設立。四十六歳の誕生日を迎えたその日、独立を果たしたのです。

バブルの時代、世の中のうかれムードの中で人手不足がすすみました。家の中にはもの

があふれ、企業は販売困難に悩んでいます。暮らし感覚に乏しい男の発想が壁につきあたり、企業の中の男たちの自信にかげりが出はじめ、女の時代だ、発想だ、感性だとふつうの女たちをおだてあげ、とうとう〝総合職〟なるものまでうみ出しました。

バブル経済が崩壊し景気後退がすすむ昨今、あの〝女コール〟はどこに行ってしまったのでしょうか。女性は矢張り景気の調整弁にすぎなかったのかとひがんでもみたくなります。女性問題はバブル経済下のひとつのヒット商品であったのかもしれません。

それにしても、近年、流通問題を専門としてきた私に、冒頭に述べたような業界やその他生産財企業からの〝女性の育成・活用・戦力化〟といったテーマが持ちこまれるケースが増えています。

ブームとしての〝女〟の時代は、バブルとともに消え去りました。しかし、女性の問題は女性固有の問題としてではなく、人間の問題として問われなおしがなされはじめたように思います。

男性がいて女性がいる。大人がいて子供がいて老人もいる。健康な人もいて病気の人もいる。企業活動も社会づくりも男女が一緒に考えて一緒に働く。男女が互いに協力、共生しあえる社会にむかって、多くの企業が立ち上がり、行動をはじめたように思います。建設という仕事は、道路をつくり、河川の安全をはかり、いわば生活の舞台づくりです。

冒頭に紹介した静岡県建設業協会は、その人間が暮らす生活の舞台をいままでは男の視点と男の手によってつくってきたが、これからは男も女も一緒になってつくっていこうというこへのスタートを切った話しです。

長い歴史の中で培われてきた生活習慣、価値観は、そう簡単に変わるとは思えません。一気に変えようとすれば、多くの場合ひづみが発生します。頭ではわかっていても…という時期が必ずあることの覚悟も必要でしょう。

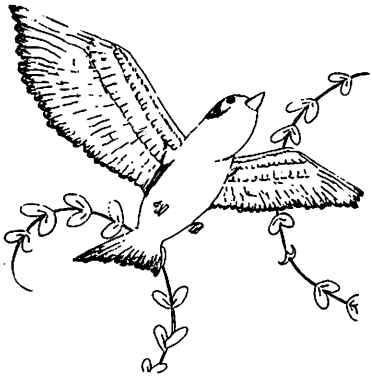
一方、女性が社会に出はじめたように、男性の方にも会社人間から脱する人生の見直しがはじまり、家庭回帰の傾向が出てきています。

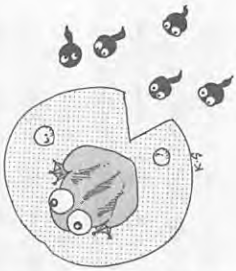
いわば、新しい人間の社会文化づくりがはじまったといえます。新しい時代のためには、男女の双方が互いに従来の固定観念からとき放たれ、自由になることが大切でしょう。ビジネス社会訓練が全般的に不足している女性にとっては、むしろ厳しい挑戦かもしれません。

同じは平等とは違います。男女は平等であっても同じではありません。ビジネス社会では、この点の誤解が時折生じて混乱を招いているように思います。

豊かな人生のためには企業の文化づくりも大切です。女性が参加しての企業社会の文化づくりを大いに期待したいと思っています。

（短英十）





香葉室

この欄は，卒業生の皆様の消息，感想文，等の発表の場として用意いたしました。今回も引き続き，昨年の講演会出欠通知から無断で転載させていただいておりますが，短大香葉会「香葉」編集局宛，次号への原稿などお送り頂ければ幸いです。

趣味

青木千恵子

五月末、短大英二回の級会が開かれました。今年は卒業四十年？と云うので集った面々感慨無量。卒業、結婚、出産、子育て等々、人それぞれの四十年。私も幾度か病気を得、これで此の世とは御別れ？と思った事さえありました。そんな私を、家族が、友が、支えて呉れました。そして幾つかの趣味が…。そして中でも一番心の支えに成り拠り所とも楽しみともなったのが、俳句でした。一九才の頃少したしなみ、短大時代は中断しましたが、次男が二才位になって、以前の句会の仲間に再び入り、それ以来三十五年近くにもなりました。又短大時代に始めた合唱、と絵、それも楽しみのひとつでした。最近合唱は高音が出しにくくなり止めました。手擦れで、ぼろぼろになった讃美歌と歳時記と絵の道具が、いつも出っ放しの片付かぬ机、それが私の人世を語ってもいるようです。短大時代に母を亡くした私は歳時記を通し又は俳句の師や先輩から、有形無形の教えを受け培われて来たのです。客観性や観察眼を学び、自然からも尊い色々な事を学びました。今、テーブルの上に星形をした薄紫の可憐な花が、コップに挿され、涼しげな雰囲気を醸し出しています。あまり知られていない鎌倉の谷戸の花「岩たばこ」です。雨季、鎌倉の谷戸の崖の岩肌に咲き、紫陽花と共に鎌倉の谷戸々々に趣きを添える此の花を知ったのも、俳句を通してでした。でも今、やたらな乱開発で、この豊かな美しい自然が失われつつあります。私はこの自然を子孫に残したいそして又、二十年来培われ育って来た日本の文化を又折々の感動やら哀歓を、絵に俳句に残したいのです。趣味は私にとって人世の旅の友でした。

住み古りて愛ほしむもの岩たばこ
十葉(じゅうよう)も花群となり刈りがたく

（短英二回）

エッグ工芸を心の友として

辰沼滋子

夕食の仕事をしている時に、卵を流しに落し割れた卵の中に、ほの白い空間をみつけた日から早いもので、もう十年の月日が経ちました。最初はパン粘土で小花や小鳥を作って中に入れ、私一人の趣味だと思っていました。だんだんイメージが広がって、宝石入や豆ランプ等の作品がふえて来た頃、知人の画家平野剛敏さんに関内の美術ギャラリーのオーナーを紹介され、小さな個展「メルヘンエッグ展」を開くことになりました。その個展がきっかけでヨーロッパやアメリカでは昔からエッグクラフトと云う工芸があり、現在はアメリカで盛んに作られていると云う事を知りました。当時はグース（がちょう）やオストリッチ（だちょう）の卵はほとんど手に入らず、小さなチキンやうずらの卵でいかに広い空間を作るかと二ケつなぎ三ケつなぎ等工夫して楽しみました。

この十年の間に同じエッグ工芸を楽しんで居られる方々と共著でエッグ工芸の本を出版させていただいたり、個展も四回、開催していただき、牛歩ではありますが作品を作り続けています。現在はアメリカのエッグクラフトの先生との連絡もとれる様になり、材料も少しずつ、手に入るようになりました。病気や悩みごとがあっても、何とか乗り切れているのは楽しみの時間が持て、打ちこめるものがある為だと思っています。最初に個展を開いて下さった画廊のオーナーが、短大時代の恩師、大河原泰之先生のいとこと云うのも不思議な御縁でした。出来ることなら、アメリカかイギリスに行って本場のエッグクラフトにふれ、短期間でも勉強が出来たら…と果せそうもない夢を描いています。

（短家八回）

二ヶ月ほど前、突然思い立って金沢八景へ行きました。学校が見たかったのです。日曜日で閑散としていました。ところどころ変化はあるものの九年間の時の流れは少しも感じられませんでした。ベンチにすわり、とりとめのない思い出話をすれば、白壁の校舎は黙って聞いてくれました。時折、相づちを打つように風が木々をゆさぶる。すてきなひとときでした。

東京都　藤野里佳（58国文）

平成三年三月三日に結婚をしました。十二月末頃には子供も産まれる予定です。主人は同年に隣りの大学を卒業し現在高校の教員をしております。夫婦で関東学院を卒業したということで子供もぜひに、と今から十数年も先の話で盛り上がっております。

宮城県　半澤智恵（63家政）

いつもおたより頂戴しております。実は住所変更をこの十年間致しておりませんで、横浜の実家からシアトルへ廻してもらい読ませていただいておりました。郵送費がかかりますので今まで通りで結構ですが一応住所変更はお届けいたします。シアトルへ御用の折にはお知らせ下さい。又、他に同窓生がここにいらっしゃいますでしょうか。同窓会が出来たらと希望を持っています。新聞に出してみましょうか。

シアトル　沢野洋子（37英文）

図書紹介

脳と保育

著者　時実　利彦
出版社　雷鳥社
紹介　真坂　孝二

私が昭和四七年関東学院女子短大の幼教に就任してから今日まで、最も感銘を受けました著書です。

著者は昭和三一年、東大教授、昭和三九年、東大医学部脳研究所所長、昭和四二年、京大教授、昭和四五年、東大を定年退官。主著に「脳と人間」（雷鳥社）、「脳の話」（岩波書店）（眼で見る脳）（東大出版会）等がある。

本書は、故時実利彦先生が昭和四四年四月から四六年三月まで、ひかりのくに社の『保育カリキュラム』誌に二三回にわたって連載された講座「脳と保育」を一冊にまとめられたものです。

今日、教育現場に於いてこどもの精神発達障害が広く見られるようになりました。

著者は、脳生理学よりみての「真の教育とは何か」、また「人間形成について」も哲学的、宗教的所信を明瞭に示しております。

現場の幼児保育、幼児教育に従事されている皆さんにとって示唆に富み、こころの支えとなる点が多いと思われます。

食生活

著者　手嶋登志子
出版社　（財）国民栄養協会
紹介　井上　啓子

『世界の人々が見守る中を〝超高齢化社会の日本〟の幕が開くのも間もなくです。―中略―世界で初めて上演されるこのドラマは国民オールキャストで始まります。そしてこのドラマは、今のお年寄りではなく、若いあなたが主役なのです。』――ズシリと重く響くこの書き出しで始まる連載は、家政科食物栄養専攻主任の手嶋登志子教授が『食生活』という、心と体の栄養マガジンで四月から始まったシリーズの冒頭です。第一回「高齢化と食生活」（四月号）第二回「老年期痴呆と食生活」（六月号）第三回「老年期痴呆と食専ケア」（七月号）と続いています。長寿大国日本。経済や医療だけではなく、身近かな毎日の食生活に目を向け、明るく健やかな長寿社会を作るためには〝今〟が大切なのだということをわかりやすく、又、痴呆性老人の方々へのケアについても先生の実践を基にくわしく書かれています。特に女性にとっては切実な問題なだけに、是非多数の方に読んでいただきたいシリーズです。

（財）国民栄養協会発行。フットワーク出版編集制作。

クラス会報告

五月会還暦記念大会

吉屋保子

風薫る五月十七日私達が毎年楽しみにしている五月会が今年は還暦という人生の節目を記念して新横浜プリンスホテルの「胡弓」に於て開催されました。光陰矢の如しと申しますが歳月の流れの早さに、ただただ驚くばかりです。私達は昭和二十七年の卒業ですからかれこれ四十年になります。此の会も幹事さんはじめ皆様のご努力により、年々大きく発展し今日の記念会をする事ができ心から感謝しております。さて当日は今も現役でご活躍中の小滝奎子先生をお招きして二十一名が一堂に勢ぞろいし、いざ合戦ではありませんがそれはそれは、にぎやかで盛大な会になりました。元広弘子さん（北九州からかけつけて下さった）の開会のお祈りに始まり小滝奎子先生のご挨拶、会員の自己紹介を兼た近況報告があり仕事の事、姑の事、孫の事、そろそろご主人が停年になった人もあり現実は様々でしたが私達は学生時代にタイムスリップして小滝先生の英文学史や英訳の授業を懐かしみました。沢山の人が先生のお陰で海外旅行しても言葉に困らなかったとか、外国人から発音が良いとほめられたと言う報告があり先生も喜んで下さいました。私達が七十才になると先生は七十七才の喜寿を迎える事になります。その時は又盛大にお祝いをしましょうと言って下さいました。又一つ目標ができたのですから頑張らなくてはいけませんね。二次会はプリンスの前のグレースホテルのティルームでお茶を飲み、きんさん、ぎんさんを見習って又来年も元気で五月会でお会いしましょうを合言葉にお別れ致しました。さゝやかな記念品として当日配られた額縁にはキャビネ版の記念写真が収まり楽しい思い出が又一つ増えました。私達はDishinger百々代さんのいらっしゃるサンフランシスコで、いつの日か五月会が開かれますよう祈っております。

（短英二）

幼児教育科第一期一年B組同窓会

日時　平成四年六月七日（日）
　　11：30～13：30
場所　上海年代記
　　伊勢佐木町不二家となり

という葉書が届いたのは、桜が見頃となる四月初旬でした。思えば、七年前、卒業後十年を経て、毎年十一月の学祭の頃毎年続けていた同窓会も、一時中断し、四年ぶりの、なつかしい知らせに、心がいつとはなしか踊り、お世話になった山田さん、幼稚園大会で、市長表彰を受けた根津さん、短大時代は、いつも机を並べてたヤザキ、キーコ、ノグチ…。皆さんどうしているかしら、と、走馬燈のごとく顔が浮かんで参りました。

思えば十九年前、あこがれの短大生になった喜びと幼児教育者になりたいという理想の

私達を、関東学院の「人になれ奉仕せよ」の教育方針のもと、幼児教育科設立の第一期生として入学ができ、諸先生方に指導して頂き、友と学びあえ、又青春を謳歌できたことは、幸せなことでありました。

さて、当日がやって参りました。一人、二人と集まる仲間は、二昔前と全くといっていいほど変わらず、ニックネームで呼びあえる友達同士でした。でもさすがに、お腹のラインや顎の線、白髪まじりの髪の毛は、人生の年輪を感じさせ、若い頃より、性格が丸くなった方々がほとんどでした。

「今日は、家庭のことは置いといて、二十年前の友達として、また女性として大いに語りあいましょう。」の幹事の乾杯の挨拶後、近況や、学生時代の話しを、次々に運ばれてくるお料理に舌づつみしながら、笑いころげたり、感心したりあっという間に一時間が経ったころ、担任の丸山先生がお見えになりました。私達の頃は、まだ幼児教育科だけがポツンと立った三号館で、他の科は大学の敷地にあった本館でしたので、授業の移動や、食堂に行くのが大変であったことをおぼえていますが、今は、とてもりっぱになられた学校のことや、先生の研究されている、子どもの絵の話のことをお話しして頂き、ほんの少し短大生に戻れた気がいたしました。

今回の出席者は十四名でした。次回は、是非A組も一緒に一人でも多くお集まり頂いて同窓会をやりたいですね。A組の幹事さんになって頂ける方連絡下さい。

幼教一B　上坂（八巻）よう子
連絡先　TEL434―3594

経営情報科五周年記念パーティー

平成四年二月二十二日（土）午後六時、新横浜グレイスホテルにて、経営情報科五周年記念パーティーが行われました。

出席者として、一期生から三期生までの卒業生および教職員、計一一五名の賑やかなパーティーとなりました。

パーティーでは、経営情報科設立のためにご苦労下さった、林前学長、永島常務理事から設立にかかわるお話をしていただき、又、卒業生たちは、久しぶりに会う友人や先生方と思い出話に花が咲いていたようです。

最後に、経営情報科設立以来、大変お世話になりました鈴木登紀男先生の退職に伴い、感謝の気持ちを込めて、花束の贈呈をさせていただきました。

平成三年卒　金井辰子

女専一期生同期会

七月四日（土）に、女専一期生の同期会が「そごう」の十階・桃源で行われました。英文科卒業生十名、家政科卒業生七名、計十七名でした。当時一緒に勉強し親しくして戴いた私が定年退職を迎えたことを、伝え聞かれゲストに迎えて下さったのです。皆々懐しく、思い出話に花が咲き、年を忘れ、時を忘れる華やいだ楽しいひとときを過ごすことが出来ました。此の二枚の写真は、同期会から戴いたもののですが、感謝いたしますと共に、皆様にご覧に入れます。

（松本久子）

県央のつどい

今年も「香葉」の紙面を通して、十一回目を迎える「県央のつどい」ご参加のお知らせを載せて頂きありがとうございます。香葉会より、毎年温かいご配慮をいただきながら、参加人数の点でいまいち…という事で、とても残念に思っております。私も幹事になって運営のむずかしさを感じつつも、一人でも多くの方が出席して下さる事を願いながら、お手伝いさせて頂いております。昨年は、ピアニスト沼田宏行氏のコンサートと楽しいお話しの会を催しました。本年も十一月頃を予定しておりますがあらためてご連絡をいたします。今までおいでになれなかった方々ぜひお会いしたいです。

綾瀬市土棚字笹山二〇〇九―四　小林　麗
（〇四六七―七七―〇一八三）
座間市四ツ谷二七八　紙透洋子
（〇四六二―五五―八〇七九）

「豊かな生活文化とは」―生活文化研究所の求めるもの―

関東学院創立100周年を記念し、本学に生活文化研究所が設置され、９年目になります。研究所の教育・研究企画も軌道にのり、順調な活動を行っています。昨年は山口所長が公開講座のご案内をいたしました。

公開講座は研究所の生涯教育を目的とした事業の一つです。1992年度のテーマは、『女性と文化 Part Ⅷ ―アクティブライフでより豊かな健やかさを―』です。健康増進における栄養・運動・休養の役割について学習します。講師の先生方は張り切っていらっしゃいます。関心をもたれる方が多いのではないかと思います。この機会に最新の研究を理解され、短大で学んだ知識をさらに高め、日頃の生活の中に生かしていただければ幸いです。

さらに、学生や教職員を対象にした特別講座も行っています。各分野でユニークな研究をされている方を講師に招き、講演をお願いしています。すでに26回を数えています。ご希望がございましたなら卒業生の方々にも聴講していただく機会を考えてみたいと思っています。

また、研究所では、共同研究も活発に行われています。各先生方の専門分野を越えた学際的テーマ、「豊かな生活文化とは何か」に向かって研究が進められ、その成果が『生活文化研究』という研究所の紀要で公開されています。懐かしい先生や新たに短大に来られた先生の共同研究が載っています。研究所、図書館にありますので、短大へ来られた機会に是非参考にしてください。

生涯教育、幅広い学校教育、そして学際的研究という多くの、重要な目的をもって進められ、研究所は10年目を迎えようとしています。これからも「豊かな生活文化とは何か」のテーマに向かって着実に研究所としての活動を積み重ねて行きたいと考えます。卒業生の皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。（生活文化研究所　主任　大越公平）

母校ニュース

▽新任教職員紹介

水沼　淑子先生
家政科　講師
住居学、ベーシック
デザイン等担当
日本女子大学　卒業

秋元　美紀さん
家政科　教務職員
関東学院女子短大
家政科　平成四年卒
業

飯田　篤子さん
英文科　教務職員
関東学院女子短大
英文科　昭和六三年
卒業

片山　彩（さやか）さん
庶務課　事務職員
関東学院女子短大
英文科　平成四年卒
業

村上　幸枝さん
国際交流センター
事務職員
関東学院大学
文学部平成四年卒業

本杉　洋一さん
教務課　事務職員
駒沢大学　法学部
平成四年卒業

〈オタワ大学と姉妹校提携〉

国際交流センターが中心となり進めていました姉妹校として、アメリカ・カンザス州オタワ大学と姉妹校提携することになりました。

この提携により、英文科を卒業し、英文科長と国際交流センター所長の推薦を受ければオタワ大学の三年次編入が可能となり、短大の修得単位六十二単位が認められるとのことです。このオタワ大学には女専第一回卒業生のフラワーズ暁子（時田）さん、中根悦子（時田）さん、第三回のリーディー・実子（田中）さん、最近では経営情報科第一回卒業生の岩本真由美さんも留学、卒業しています。創立一二七年の歴史ある大学との姉妹校提携により、新しい時代へ向けてまた一歩踏み出しました。

なお、他学科、既卒業生もTOEFLの成績等、条件を満たしていれば留学は可能です。

〈専攻科英語専攻、学位授与機構により認定〉

本年四月より、専攻科英語専攻は、学位授与機構により大学相当の授業を行う能力があると認定されました。これは、専攻科修得単位と四年制大学の聴講単位とを合わせて六二単位以上修得すれば、学士の学位を申請できるというものです。審査は予想以上に厳しく私立短大四一校一六専攻が申し出て、認定されたのは一五校。英語系の専攻では本学を含めて三校だけでした。

編集後記

香葉二十一号。編集委員も新しくなり、若がえった第一号です。毎号のお馴染みのページあり、新しい企画ありでいかがでしたか？キャンパスマップを持って、短大祭におでかけ下さい。新しい学校と海とを見に……。

皆様の楽しい企画、お手紙を編集員一同でお待ちしております。

平成3年度決算				平成4年度予算
収入の部	予算	決算	増減	予算
会費	(@18,000×884) 15,912,000	15,912,000	0	(@18,000×856) 15,408,000
賛助金	500,000	835,000	△ 335,000	500,000
預金利息	10,000	115,425	△ 105,425	50,000
雑収入	5,000	21,682	△ 16,682	5,000
前年度繰越金	2,364,580	2,364,580	0	3,753,441
振替収入	――	――	――	524,031
合計	18,791,580	19,248,687	△ 457,107	20,240,472
支出の部	予算	決算	増減	予算
通信費	3,200,000	2,776,205	423,795	2,300,000
印刷・製本費	2,800,000	1,725,428	1,074,572	2,000,000
総会・会合費	2,150,000	1,187,741	962,259	2,200,000
交通費	500,000	316,203	183,797	500,000
用品費	150,000	124,630	25,370	150,000
備品費	50,000	28,059	21,941	100,000
委託費	700,000	475,582	224,418	750,000
謝礼費	350,000	312,050	37,950	350,000
消耗品費	50,000	6,686	43,314	50,000
人件費	1,600,000	1,538,080	61,920	2,450,000
合同同窓会分担金	(@300×884) 265,200	265,200	0	(@300×856) 256,800
新入会員歓迎費	1,400,000	1,254,540	145,460	1,500,000
名簿発行準備金	3,000,000	3,000,000	0	4,000,000
特別会計	2,000,000	2,000,000	0	2,000,000
慶弔費	400,000	309,594	90,406	700,000
予備費	150,000	169,590	△ 19,590	350,000
新規活動準備金	――	――	――	550,000
雑費	26,380	5,658	20,722	33,672
(小計)	18,791,580	15,495,246	3,296,334	20,240,472
次年度繰越金	0	3,753,441	△ 3,753,441	0
合計	18,791,580	19,248,687	△ 457,107	20,240,472

賛助金をご寄付くださった方へのお礼とお願い

今年も後記の方々から総額「八十三万五千円」をお送り頂き、厚く御礼申し上げます。諸物価の値上げにより、年々「香葉」の発行がむずかしくなってまいりましたが、卒業生唯一の雑誌をなくしたくないと、編集員一同がんばっておりますので、今後共賛助金の御協力をよろしくお願い致します。

一九九一年度賛助金寄付者（敬称略）

主馬野敦子　小林守信　田牧洋子　土岐房子
増田安喜子　伊藤孝子　岸　直美　近藤純子
高斎香代子　古城房子　木村燁子　渋谷敦子
朝久野弥生　小川諒子　須藤和子　高山政子
江波戸房子　中村一恵　岩沢弥生　荒井静子
薮田美千穂　鈴木京子　金原幸枝　高畑早苗
高橋美佐子　井上昌恵　佐藤薔薇　石井孝江
小林三恵子　増田京子　上原和代　伊藤明乃
清田恵美子　中里玲子　西本素子　熊谷君代
大橋多見子　徐多恵子　林　治子　中村武雄
中田美恵子　岸　尚子　川島久里　丸山　忍
芦部九女夫　伊澤敏恵　森由紀子　高橋静子
小出美智代　内田靖枝　阿部弥生　田中直子
木下紀美子　矢田宏子　根本千波　石川弘子
梅山フク江　杉山愛子　笠木茂伸　重田和子
渋谷三千代　鶴見智子　木村典子　光畑　清　鈴木廸子　吉田君子
錦織マサ子　玉木宮子　大川幸子　千田春枝
瀬谷のぶ子　小林　恵　大貫有香　平田順子
飯塚まり子　森田　玲　飯吉玲子　園田靖子
石井知栄子　原嶋暲子　塚本令子　大越浩子
佐々木晶美　高木良子　古郡綾子　中川あや
森野恵理子　山内晴美　岡村美香　鈴木美穂
滝沢キミ子　高橋朱美　濱中景子　岸　孝子
杉　由紀子　小林成子　杉浦睦子　田中久恵
吉田美津子　滝沢久恵　雨宮慶子　鈴木千春
山口はるみ　遠田順子　岩澤克恵　浅葉勝美
関口眞喜子　成川勝子　井上則子　保母静子
三代川典子　渥美裕子　熊谷元子　大坂恵子
齊藤恵美子　深谷京子　中川道子　田辺和子
五十嵐増枝　福崎浩子　黒滝良子　菅野弘恵
田中宇多子　郡司裕子　須田広子　岡部良子
濱田二三栄　堺　典子　佐藤美代　寺内雅子
上川奈緒子　村松治子　角津允子　石井昭子
佐々木明子　石守ゑみ　中根悦子　積田昌子
杉崎日出子　山上明子　菊地和子　田中和子
福田しほり　髙橋秀子　加藤裕子　松田良子
前田由紀子　戸田美保　澤島時子　内藤淳子
椿原千佳子　安藤憲子　臼田修良　高瀬安雄
白鳥美智子　都竹道美　鈴木清子　柳川礼子
山田由美子　谷山章子　和知章子　谷山章子
山本久美子　鈴木嚴夫
武田由紀子　月本鈴子　永島興子　野口史乃
松野トシ子　森　禎子　足立求子　野口典子
中嶋貴美子　田辺洋子　遠藤知子　千田節男
中村紀佐子　土山　忠　菊地安子　越智協子
青木美代子　石塚則子　井田玲子　細野清美
田丸瑠実子　金田春美　斎藤末子　菅野宮予
斉藤美保子　松山順子　野永裕子　石塚玲子
後藤美和子　丸山真紀　中村智子　斉田実子
三野宮恭子　飯島敏子　岩堀迪子　口林祐子
岩野由美子　露木球恵　北村直美　長崎洋子
岡田万里子　小西晶子　村上節子　早野佳恵
越野美恵子　土屋幸枝　樋川純江　花岡淳子
関谷由利子　伊藤精彦　石渡朝子　小谷泰子
石井乃利子　西尾和弘　吉田弘子　出榮美子
八木智恵子　吉川雅子　飯田染子　国原啓子
鈴木恵美子　保科恭子　中西愛子　志賀ミチ
馬屋原麻里　柳生二三　岡崎敬子　安彦潤子
井上多恵子　吉屋保子　加藤久子　三冨正枝
青木智恵子　吉野美貴　石田禎子　葛城容子
千川奈緒美　辰沼滋子　内田駒子　近藤睦子
長谷川不二恵　クリスチャンミチコ　益　昌子
吉屋　敬　短英II一期生会　馬屋原有利子
相吉典子　鍵山和泉　古賀恵子　澄谷亮子
藤田美和　岸本有加　作山智子　五十嵐直子
小杉紀子　佐藤久子　加藤和子　細田喜久子
岸　澄子　大竹春美　井上啓子　柳本キヨ子
見目光江　矢嶋道文　匿名　肆矢三佐子

後輩へ就職求人を！

本学卒業生の就職については、卒業生の実績が実を結び、毎年卒業予定者の2～3倍に達する求人があり、各科共百パーセントに近い成績をあげています。しかし、地方出身者に関しては、短大卒業生を受け入れる職場が少ないのです。そこで、高校卒業生に比較し、対人応待等に優れ、即、戦力化し易い短大卒業生、皆様の後輩採用を、皆様及び皆様のご主人に是非、ご検討いただきたいのです。

短大生ご採用のお話しがございましたら、下記就職課迄、ご連絡いただけますように、お願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834　Tel（045）787－7868～9

関東学院女子短期大学就職課

香葉 第21号

平成4年9月25日　印刷・発行

関東学院女子短期大学・香葉会

代表者　古城房子

横浜市金沢区六浦町4834　郵便番号236

関東学院女子短期大学内

電話《045》787－7859

関東学院同窓会・香葉会誌